V．近代から現代にかけての熊野　（今から160年前から現在まで）

明治になり、東京などの大都市では「文明開化」が花開きますが、地方の変化はゆっくりでした。しかし、熊野でも、その時代のリーダーたちが道路を直し、橋をかけ、馬車や乗合自動車を導入して生活を便利にし、産業をさかんにしました。

廃藩置県

江戸幕府最後の将軍 徳川慶喜が、大政奉還をしたことで、江戸時代は終わりを告げました。幕府より尾張、紀州、水戸の徳川御三家に付けられた「もり役」の成瀬、竹腰、安藤、水野、中山の「五家」は、大名としてあつかってもらうよう何度も幕府に働きかけましたが、夢はかないませんでした。しかし、1868年（明治元年）1月24日に、明治新政府は、この「五家」を大名として扱うことにしました。紀州藩の支藩であった田辺領、新宮領は、それぞれ紀州藩より独立した田辺藩、新宮藩となったのでした。

熊野市内の地区は次の通りの２つの藩に属していました。

和歌山本藩領	…須野、甫母、二木島里、二木島、遊木、新鹿、波田須、磯崎、大泊、木本、育生、神川、五郷、飛鳥、紀和町（赤木・長尾・平谷・大河内・丸山・矢ノ川・大栗須）
新宮藩領	…井戸、有馬、金山、久生屋、神川町花知、育生町大井 紀和町（小森・木津呂・小川口・湯ノ口・小栗須・花井・小船・楊枝・楊枝川・和気）

「新宮県」って、知ってた！？

1871年（明治４年）７月14日。明治時代になっても江戸時代の「藩」という制度が引き続き残ったので、木戸孝允、大久保利通らの提案で、261もあった藩を廃止し、府県制を実施しました。「廃藩置県」です。和歌山藩は「和歌山県」、新宮藩は「新宮県」と呼び名が変わりました。

ところが、その年の11月22日に、熊野川と北山川を県境として、西側を和歌山県、東側を度会県とすることになりました。ここに「新宮県」はなくなりました。わたしたちの熊野市の全ての地区が度会県に属することになりました。

（建物と建物の間が新宮県と和歌山県の県境）

（和歌山県と度会県）

（新宮県と和歌山県）

さらに、1876年（明治９年）４月18日、度会県は廃止され、安濃津県と合わさって三重県が誕生し、今日にいたっています。

（頑丈な石を敷き詰めた県境）

これより西 新宮藩領 これより東 紀州本藩領

（県境の前に江戸時代の領地を示す看板があった）

飛び地　北山村の誕生

この廃藩置県では、熊野川と北山川を県境とすることになりました。しかし、この方針を貫くと新宮県であった北山村は、奈良県に組み入れられてしまいます。おそらく明治政府の役人の勘違いがあったのでしょう。元々新宮とのつながりの強かった北山村は和歌山県に組み入れられ、ここに全国で唯一の飛び地が誕生しました。

新宮とのつながりが強いと言われる北山村です。しかし、七色ダムの建設によって熊野市までの道路が整備され、新宮よりむしろ熊野市とのつながりの方が強くなりました。そのため、平成の時代に「三重県に入るかどうか」という住民投票もありました。住民投票の結果、北山村は和歌山県に残りました。北山村が経営するバスは、直通でＪＲ熊野市駅まで走っています。

（全国で唯一の飛び地「和歌山県北山村」）

（ＪＲ熊野市駅まで直通の北山村営バス）

日本写真界の先駆者　田本研造

出　生

江戸時代末期の1831年（天保２年）、神上村（現在の神川町神上）の農家の長男として田本研造は生まれました。家は10反あまりの田と広大な山林を所有する豊かな農家で、研造は何不自由ない少年時代を送りました。

（田本研造の生家跡）

好奇心

少年時代の田本研造は人一倍好奇心が強く、しばしば対岸の七色から筏に乗せてもらっては、はるか下流の新宮に出かけました。当時の新宮は、炭や木材の積出港として栄え、いろいろな国からの巡礼、商人や旅芸人の集まる町としてとてもにぎわっていました。熊野川の河原には十津川や北山川から筏を流してくる筏師のための宿屋・飯屋・飲み屋などがずらりと並び、夜中まで人の声が絶えませんでした。研造は他国の人から土産話を聞くことをこよなく愛しました。

旅立ち

22歳のとき、研造は村を離れる決意をします。この時代、農家の子が農家を継ぐことはいわば当然のこととされてきましたが、研造はそれをきっぱりと断り、医術を学ぶ志を立て、遠く長崎を目指して旅立つことにしました。この頃、京・大坂の上方に向かうには、大和街道のけわしい道をひたすら北に向け歩き続けるしか方法はありませんでした。しかし、研造の思いはあつく、悪路をものともしませんでした。

長　崎

長崎は当時、わが国におけるただ一つの外国への窓口で、最も先端を行く文化の集まるところでした。ことに、蘭学や医学を学ぶには最適の町といってよく、学問を志す者は多く長崎をめざしました。また、この土地では、医学のほかに写真術という、生まれて初めて見る新しい世界に大きな興味をもちました。

＊　蘭学 … オランダ語の書物によって、西洋の学術を研究しようとした学問。

（長崎港）　江戸時代から世界に開かれた日本の窓

箱館へ

28 歳の時、研造は新しい開港地 箱館（現在の函館）へと向かいます。箱館は５年前の 1854 年（安政元年）日米和親条約で下田とともに開かれた港で、アメリカ・ロシア・イギリス･フランスなど諸国の船が出入りし、早くも貿易港としてのにぎわいをみせていました。研造は、異国情緒あふれる新しく開かれた港町で、医術の道をさらに深めようと意欲を燃やしました。

しかし、箱館に来て３年目のこと、悲運が研造をおそいます。前年冬の凍傷が原因で右足が腐り出す壊疽になり、切断することになったのです。この手術にあたったのはロシア領事館の医師ゼレンスキーで、この人のおかげで研造は一命をとりとめたことのみならず、彼からはロシア流の写真術を学ぶという幸運を得ました。

（函館港）

新たな出発

医術の道をあきらめざるを得なくなった研造ですが、眼ざしは新しい世界をしっかり見つめていました。研造はただちに、軽くて丈夫な外国製の義足を注文し、暗箱など写真撮影に必要な一切の道具を取りそろえ、写真館を開業しました。身体の不自由な研造に代わってこれらの手配を行ったのは、箱館における彼の友人たちでした。研造の誠実な人柄は、わずか２年あまりの滞在のうちに多くの人々を引きつけていました。

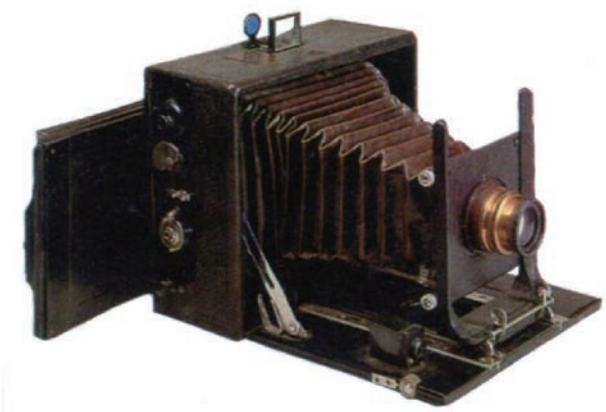
ときあたかも戊辰戦争（旧幕府方と明治新政府間の戦い）の時期。箱館には榎本武揚率いる旧幕府軍が陣を構え、明治新政府軍の進攻を待ち構えていました。箱館の空気はしだいに重苦しいものに変化していきました。

写真師　田本研造

当時、写真は高度な技術を要する仕事で、箱館でも写真館は数えるほどしかありませんでした。

ある日の午後、箱館会所町にある写真館 田本研造写場を訪れた客がありました。新撰組副長、土方歳三です。歳三は、すでに、来るべき自分の死を覚悟したものでしょうか。田本写場を訪れると、しばしの世間話の後、自らの記念写真をもとめました。ラシャの黒服に身を包んだ土方歳三は、想いにふけるような表情で写真に収まっています。当時の写真術はコロジオン（湿式）といって湿板がぬれている間にその場で写真を処理するというもので、写される人物は30分ほど姿勢を動かさずにじっとしている必要がありました。

土方歳三は、この５ヵ月後、五稜郭の戦いで黒服を赤く染めて壮絶な戦死をとげます。現在に残る歳三の肖像写真は、この日に撮影されたものが唯一のものです。研造はこの後、榎本武揚、旧幕府軍を支援したフランス人士官たちなど、歴史的価値の高い数多くの写真を仕上げました。



（当時の写真機）

（土方歳三）函館市立中央図書館所蔵

北海道各地の撮影

1869年（明治２年）５月、戊辰戦争はついに終結し、８月、蝦夷地は「北海道」と改められ、北海道開拓を司る「開拓使」が置かれて本格的な開発が始まります。研造はその技術を見込まれ、開拓使お抱えの写真師として北海道内各地の開発の様子を写真に記録することになります。

ただ、その当時の撮影旅行は、現在とは違って大変困難なものでした。暗箱と呼ばれた大きな写真機や水洗いのおけ、薬品など一切を積んだ荷車を助手に引かせ、不自由な右足をかばいながら道内各地をめぐりました。その足跡は、室蘭、釧路、根室、登別、江差と北海道全域に及んでいます。

11年間にわたる撮影活動は5000枚にも及ぶ貴重な記録写真をもたらしました。現在、私たちが北海道開拓のようすをつぶさに見ることができるのは、実にこのときの田本研造の働きによるものです。

遠く北辺の地にありながらも、研造は故郷熊野のことをひとときたりとも忘れたことはありませんでした。その熱い思いは、彼が送った手紙の数々によって知られます。しかし、ついに帰る機会は得られず、1912年（大正元年）81歳を以て北の大地に骨をうずめました。

（晩年の田本研造）

高城川の水を治める　森本佐兵衛

（森本佐兵衛）

森本佐兵衛は、1835年（天保５年）６月に生まれました。佐兵衛は、木本町関船でしょう油を作る仕事をしていました。その後、木本町布袋町に移り、亀齢館という旅館の主人となりました。1871年（明治４年）７月14日の廃藩置県で、紀州本藩領であった木本は、和歌山県に属することになりましたが、その年の11月22日には度会県に属することとなりました。大庄屋という制度は戸長という名前にかわり、木本には戸長役所が設けられました。1874年（明治７年）、40才の佐兵衛は木本戸長となり、木本の人たちのためにカをつくしました。

＊　戸長 … 今でいう“町長”のような地区のリーダーのことです。

高城川の洪水とたたかう！

佐兵衛が木本戸長となって最初に取り組んだのが、高城川の洪水問題でした。切立の谷から流れる高城川の水は、木本の人々にとってそれは大切な生活用水でした。しかし、この高城川は当時、赤坂と要害山にさえぎられていて、下流はいつも湖のようになっていました。水のはけ口がなく、大雨が降ると木本小学校の裏（井筒町）から祐福寺（栄町）の辺りまで湖となり、わずかしかない田も被害を受け一粒の米もとれなくなることがしばしばありました。水深140㎝にもおよぶ洪水も記録に残っています。

（Ｐ74の“木本町割り絵図”を見よう）

高城川の洪水による被害が大きいため、木本の人々はこれを取りのぞこうと何度も工事にとりかかりました。しかし、江戸時代の土木技術のレベルは低く、しかもお金も足りず、失敗をくり返しました。1875年（明治８年）、佐兵衛は楊枝（紀和町）の銅山で働く坑夫を５、６人やとい、赤坂池尻の堀を抜く工事を始めました。工事費用はとても高く、お金をどのようにして集めるかが大きな問題でした。戸長である佐兵衛は本当に苦労しました。佐兵衛の苦労を分かった木本町内の有力者たちが極楽寺に集まり、協力をちかいました。図面引きや設計書の写し、石積みや土手の工事の手伝いもしました。この結果、木本の人々は高城川の洪水に悩まされることはなくなりました。

（要害山の下にトンネルを掘った）

（森本佐兵衛の功績を刻んだ碑）

（工事の様子）要害山はまだ削（けず）られていなかった

（現在の高城川）

亀齢橋（きれいばし）

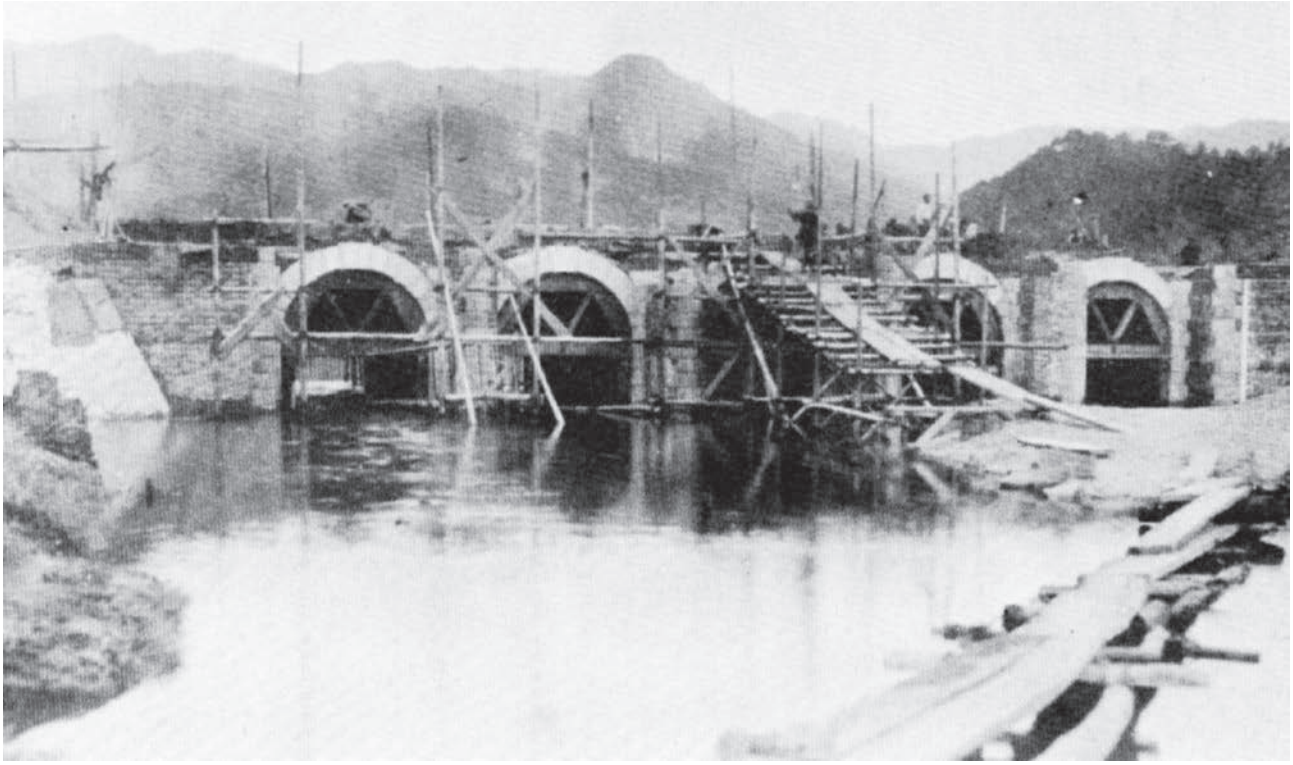
森本佐兵衛のもう一つの大きな仕事が井戸川下流にかけられた橋です。この橋をかける工事は、1886年（明治19年）に始められました。これは、高城川の池尻（いけじり）の堀抜（ほりぬ）きをしたことで、高城川の水が井戸川に流れこみ、水かさが増したことにともなって計画されたものでした。佐兵衛は研究熱心で、静岡県の大井川、富士川、安倍川にかけられた橋の進んだ技術を学び、橋の設計までやっています。佐兵衛が自分のお金を出してかけた木造（もくぞう）の橋でした。

井戸川下流の橋は、1886年（明治9年）10月に完成しました。木本戸長の佐兵衛は旅館の主人でもあり、その旅館「亀齢館（きれいかん）」の名前をとって、「亀齢橋（きれいばし）」と名付（なづ）けられました。

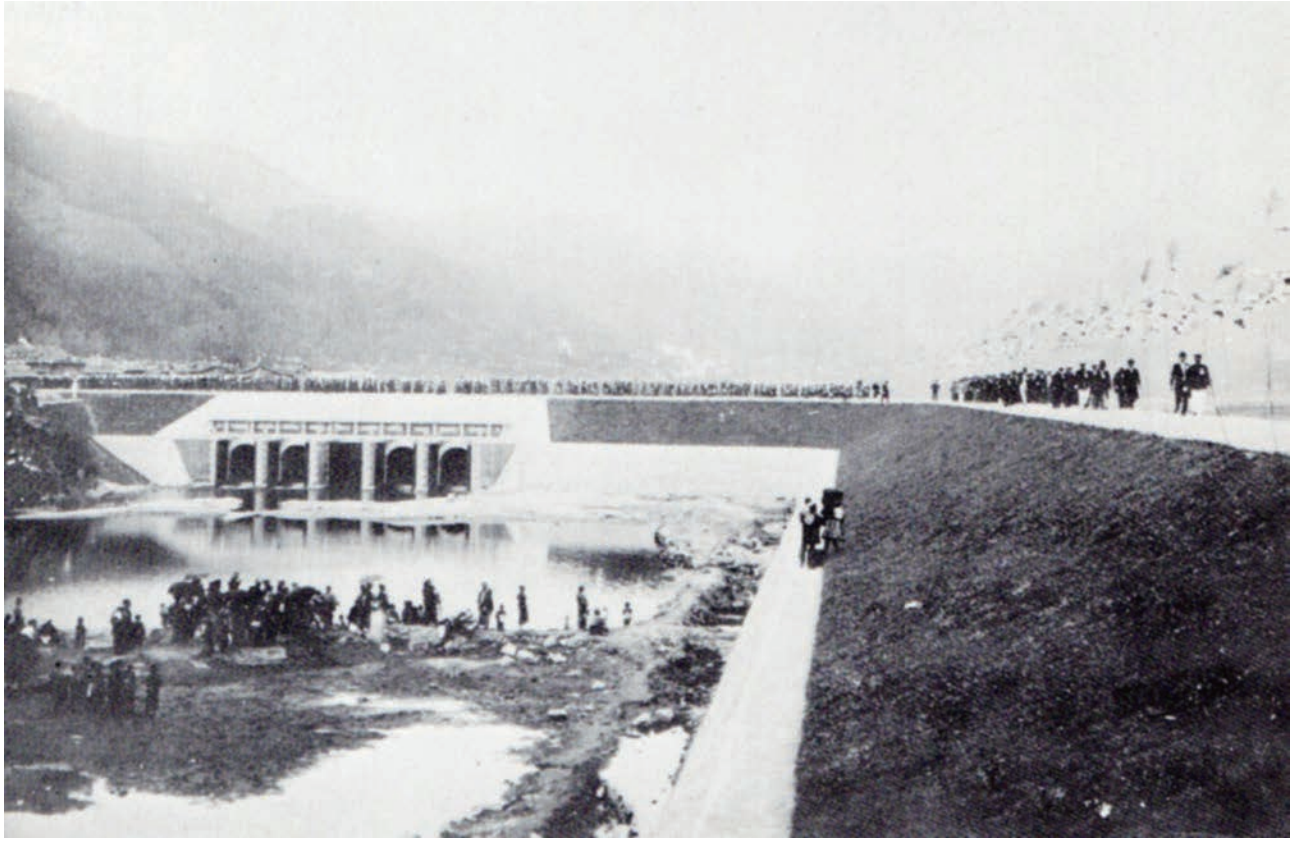
昔は、本町通りがメインストリートで、井戸町松原から馬留（うまどめ）、新出町（しんでまち）、本町方面に向けて橋がかけられました。木造の亀齢橋の左はしに大石医院、まんなかに奥川屋の蔵（くら）が見えます。

1907年（明治40年）頃の亀齢橋は、すでに古くなっていて、人力車などが通るとグラグラゆれておそろしいほどでした。そこで県のお金で水門付（すいもんつ）きの橋にかけ替（か）えることになりましたが、「亀齢橋」の名前が受け継（つ）がれています。

（木造（もくぞう）の頃の亀齢橋（きれいばし））



（工事が進む亀齢橋）



（1907年（明治40年）完成の珍しい水門付きの亀齢橋）

水門の付いた亀齢橋の完成に、多くの人々が喜び、祝いました。

おはなし

河童伝説

河童伝説は日本全国にあり、呼び名もその姿かたちも地域によってちがいます。熊野市内では、河童のことを「ガラボシ」や「ガラボウシ」と呼び、「ガロ」なんて呼び方もあります。河童は、川、沼の水の中や水辺にすむと言われています。例えば、神川町花知では、「川のあく日（旧暦６月16日）に川へ行くとガラボウシに引かれる。それで初なりのきゅうりを川に流して悪いことをしないようにした」と言い伝えられています。また、育生町尾川では、「食事をとらずに川へ泳ぎに行くと、ガラボウシに尻の根をひかれて死ぬ」と言い伝えられています。五郷、磯崎にも河童伝説があります。

ガラボシとの約束　―飛鳥町小阪の平地区―

小阪を流れる大又川の淵に、小さな橋がかかっていて、そこを通っては川に落ちて水死した人が多くいました。それは「河童ガラボシの仕業だ」と言われていました。

あるとき、この川原で牛を放牧していました。いつの間にかガラボシが現れ、牛の綱を外して自分の腰に巻きつけ、川の中に引き込もうとしました。しかし、この牛はガラボシよりも力があり、懸命に川原にかけ上がりました。その勢いにつられてガラボシも一緒に川原に上がってしまいました。

騒ぎを聞きつけた村人たちは、悪さを繰り返してきたガラボシを捕まえます。そのガラボシに向かって村人たちは、「もう悪さをしないか。二度とここに現れないか。」と厳しい口調で言いました。すると、ガラボシは、「この村で好物のキュウリを作らなかったらもう出てこない。」と答えます。ここに村人とガラボシとの間に約束が成り立ち、「小阪の平地区では絶対にキュウリを作らない」ということになりました。

（大又川の淵）

時は流れ、1980年（昭和55年）の秋、当時の農業協同組合（ＪＡ）から、「平地区でキュウリを作ってもらえないか。」という話が持ち上がりました。先祖とガラボシが交わした「絶対にキュウリを作らない」という約束を破ってもいいものか、平地区の人たちは、何度も集まっては真剣に話し合いました。翌年の春、この地区でキュウリの栽培が始まりました。ガラボシとの約束を破ってしまいましたが、ガラボシによる災いはおこりませんでした。小阪の平地区の人々はそのことに感謝し、川の石で「カッパの碑」を建てました。

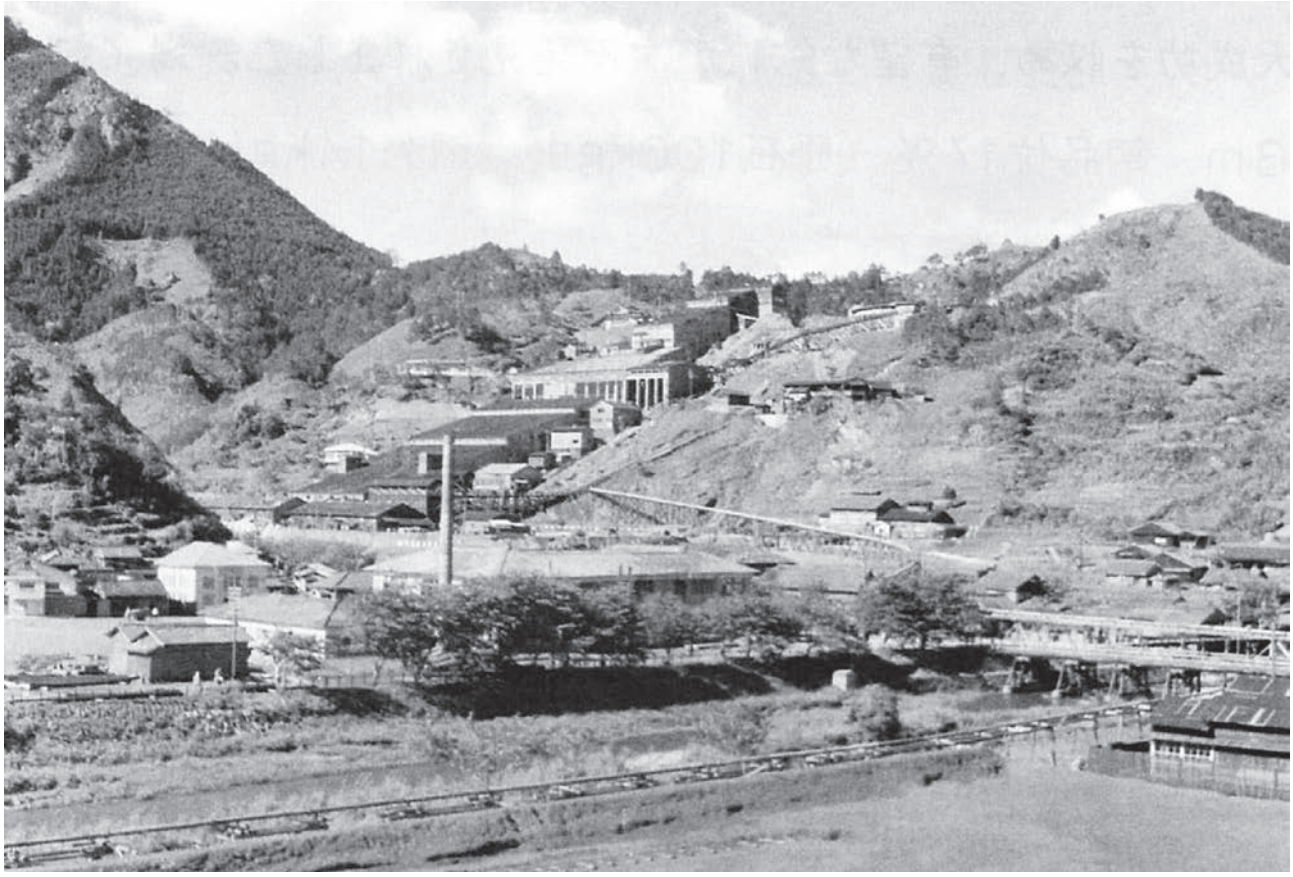
（カッパの碑）

紀州鉱山の発展と閉山

市内最大の産業遺産

紀和町板屋から西を見ると、小高い山の上からふもとにかけて、巨大な建造物が階段状にそびえたっているのが目に入ります。これが、かつて「東洋一」と言われた石原産業紀州鉱山選鉱場の今日の姿で、紀州鉱山のはんえいを今に伝えています。

ここでは、紀州鉱山の成立と発展、そして閉山の姿を追って、熊野の山間に半世紀の輝きを見せた産業文化について学んでいきたいと思います。



（紀州鉱山　選鉱場）

近代以前の鉱山

ふるく、奈良時代（710 年～ 784 年）から採掘が進められてきた紀和町の銅山は、江戸時代（1603 年～ 1867 年）にはその数 36 をかぞえるようになります。

明治・大正時代にもその営みは受け継がれ、昭和の初め頃（1930 年頃）には、小森・西山・大栗須・小栗須・板屋・湯ノ口・大河内・楊枝・花井・小船・和気・島津などで、小規模な銅山が操業していました。

しかし、経営の苦しいところが多く、落ばんや熊野川の洪水による坑道の水没にも悩まされていました。

石原産業の進出

1934年（昭和９年）、神戸に本社を置く石原産業海運株式会社が、紀伊半島一帯の鉱山開発を目的に、当時の上川村（紀和町上川）に進出してきました。

石原産業は、当時最新鋭の土木機械を使って、大峪～湯ノ口間730ｍ、湯ノ口～惣房間3000ｍの大坑道を掘り上げました。大坑道によって貨物の運搬を容易にするとともに、新しい鉱脈を発見しようとしました。計画は大成功を収め、有望な鉱脈が次々に発見されました。湯ノ口近くでは、鉱脈の幅３ｍ、銅品位14％（原石100kg中、銅が14kg）という、きわめて優秀な鉱脈まで発見されるに及びました。

1940年（昭和15年）頃には、板屋から上川にかけての地下には、クモの巣のような坑道網が出来上がり、蓄電池を動力とする機関車のバッテリーカーが20両もの貨車を連結して銅鉱石を運び上げていました。この頃、紀州鉱山は日本でも有数の大鉱山に成長していました。

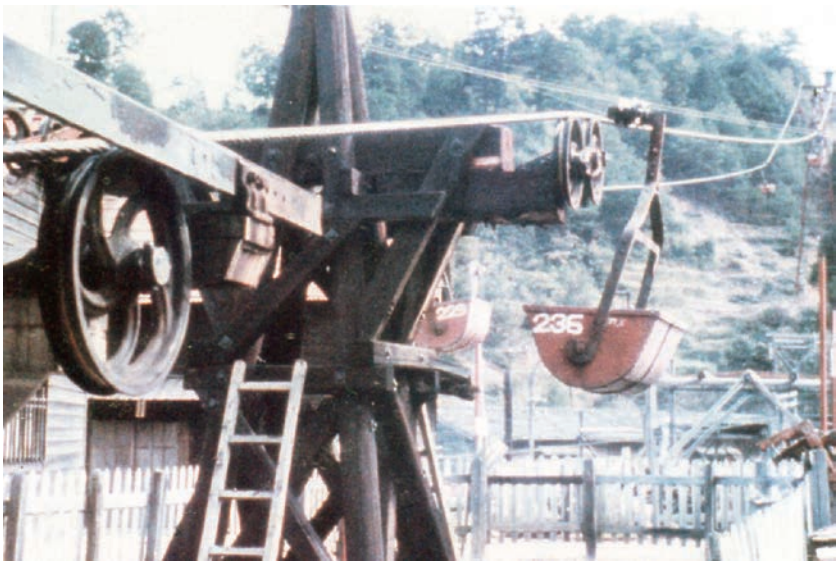
（バッテリーカー）鉱石だけでなく、坑夫も運んだ

近代以前の鉱山

生産の拡大によって選鉱場も大拡張され、1941年（昭和16年）には１日の鉱石の選鉱量2000トン、東洋一といわれる規模になりました。鉱石の輸送はトラックだけでは間に合わなくなり、大型のリフトである空中索道が設けられました。

風伝峠をトラックが列をなし、そのすぐ上を索道が移動するという光景が見られるようになりました。

鉱石は、いったん阿田和駅（御浜町）に運ばれ、貨物列車に積み替えられて和歌山県の浦神港（那智勝浦町）へ、さらにそこから船でという形で輸送されました。



（空中索道）　鉱石を輸送

戦時下の紀州鉱山

1941年（昭和16年）、日本は無謀な戦争に向かっていきました。戦時下、軍の監視のもとに鉱山は大増産を強いられましたが、肝心の坑夫の多数を兵隊にとられ、増産はなかなか進みませんでした。

そこで軍は、戦争が始まった頃、シンガポールで捕虜にしたイギリス兵300人を、はるばる熊野の板屋に移送して、地底の作業にあたらせることにしました。

イギリス兵たちは、捕虜でありながらもイギリス人の誇りを忘れず、紳士的に振る舞い、作業にあたっても、「彼らは勤勉で、能率的だった。」と日本人に言わせるほど精力的に働いたといいます。

土地の人々もイギリス兵たちには優しく接し、食糧難の中にあっても、野菜などの供出に積極的に協力しました。

残念なことに、イギリス兵たちが滞在した1年余りの間に、16名の兵士が病気で命を落とし、紀和町所山の収容所跡にほうむられました。その墓地は、今日まで土地の人々によって守られ、いつも花が捧げられています。

1992年（平成４年）10月、かつて捕虜として紀和町で労働したイギリスの人々が、同町出身の恵子ホームズさんの働きかけによって、ほぼ半世紀ぶりに紀和町の土を踏み、異郷で果てた戦友の霊に深い祈りを捧げました。おだやかな秋の空に、英語と日本語による讃美歌の大合唱が長く響いていました。

（英国人墓地）

閉　山

50年近くにわたって紀和町の経済を支えてきた紀州鉱山でしたが、1970年（昭和45年）頃から銅の国際価格が下がり続け、一方で、坑道の位置が深くなるほどに採掘の費用がかさみ、とうとう、1978年（昭和53年）５月をもって閉山することになりました。

この間に採掘した鉱石は約900万トン、坑道の延長は実に320㎞（熊野市から直線で、ほぼ富士山にいたる距離）。最も深いところの坑道は地下420ｍの深さに達しました。

おはなし

三反帆（団平船）

紀和町西部の小川口・湯ノ口・花井・小船・楊枝・和気の各地区は北山川や熊野川に面し、昔から下流の新宮と結び付きの強い地域です。

今から60年ほど前までは、これらの地区と海岸部を結ぶ道路がなかったため、人や物の行き来はもっぱら川船によって行われてきました。

上流からは、銅鉱石（楊枝川・惣房で採掘）、石炭（和歌山県側の志古で採掘）や木炭・板などが川を下り、帰りには、新宮で買い入れた酒・しょうゆ・米・みそ・衣類などが川を上りました。

下りは川の流れを利用し、上りは、大きく張った３枚の布の帆に風を受けて進みました。

帆柱の高さは５ｍほどもあり、反物を３枚垂らしたように見えるので「三反帆」とよばれました。底が平たい船なので団平船と呼ばれることもありました。この船は、1960年（昭和35年）ころまで熊野川・北山川などで活躍していました。紀和町には、和気・小船・楊枝などに約40そうもの三反帆がありました。

（三反帆）

三反帆はふつう、早朝に紀和町の各地を出航して朝のうちに新宮に着き、昼ごろ吹く南風に乗って熊野川をさかのぼりました。しかし、その運航は苦労の多いものでした。特に上りの時は、風が止んだり、ときには逆風になったりすることもあり、そういう時には人がロープを引くしかありませんでした。米を20俵積んだ場合で、新宮から紀和町までは２日間ほどかかったといわれます。

紀和町和気の川端には、航海の守り神「金毘羅さん」を祀った祠が見られます。このことからも、当時の川船の仕事がどんなに危険であったかを知ることができます。